

# 高橋虫麻呂の筑波山関連歌の「嘯」の表現について

李 満 紅

万葉第三期の歌人である高橋虫麻呂は、常陸国に赴任して、筑波山関連歌など当地の習俗、風土を背景にした多くの歌を詠んだ。虫麻呂の筑波山関連歌は、次に掲げるAからDまでの4つの歌群である。

### A

筑波山に登らざりしことを惜しむ歌一首  
筑波嶺に 我が行けりせば ほととぎす 山彦とよめ 鳴かま  
しやそれ (8・一四九七)

右の一首、高橋連虫麻呂が歌の中に出でたり。

### B

検税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌一首 并せて短  
歌  
衣手 常陸の国の 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来  
ませりと 暑けくに 汗かきなけ 木の根取り 嘯鳴き登  
り 尾の上を 君に見すれば 男神も 許したまひ 女神も  
ちはひたまひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を さやに照

### C

今日の日に いかにか及かむ 筑波嶺に 昔の人の 来けむそ  
の日も (9・一七五四)

#### 反歌

らして いふかりし 国のまほらを つばらかに 示したまへ  
ば 嬉しひと 紐の緒解きて 家のごと 解けてそ遊ぶ うち  
なびく 春見ましゆは 夏草の 繁きはあれど 今日の楽しさ  
(9・一七五三)

筑波山に登る歌一首 并せて短歌

草枕 旅の憂へを 慰もる 事もありやと 筑波嶺に 登り  
て見れば 尾花散る 師付の田居に 雁がねも 寒く来鳴き  
ぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の  
良けくを見れば 長き日に 思ひ積み来し 憂へは止みぬ  
(9・一七五七)

#### 反歌

筑波嶺の 裾廻の田居に 秋田刈る 妹がり遣らむ 黄葉手折  
らな (9・一七五八)

筑波嶺に登りて燿歌会を為る日に作る歌一首 并せて短歌  
 鷺の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひ  
 て 娘子壯士の 行き集ひ かがふ燿歌に 人妻に 我も交は  
 らむ 我が妻に 人も言問へ この山を うしはく神の 昔よ  
 り 禁めぬ行事ぞ 今日のみは めぐしもな見そ 言も咎むな  
 (燿歌は、東の俗の語にかがひと曰ふ) (9・一七五九)

## 反歌

男神に 雲立ち登り しぐれ降り 濡れ通るとも 我帰らめや  
 (9・一七六〇)

今回はBの一七五三番歌の「嘯」の表現について考察する。当該歌は虫麻呂が、検税使大伴卿、つまり大伴旅人を筑波山に案内した時の歌である。「嘯鳴き登り」(原文「嘯鳴登」)の解釈について、従来は「あえぎながら登り」と解釈されているが、「嘯(うそぶき)は本来「口をすぼめて、腹の底、喉の奥から息を強く吐き出す」の意である。主な用例を分析し、「嘯」が歌全体にどのような意味をもたらしているかについて分析する。

## 漢籍の「嘯」の用法

漢籍における「嘯」といえば、まず竹林七賢の阮籍のことを思いだす。『世説新語』「隱逸第十八」には次のような阮籍と孫登(楚門山隱者)に関する逸話がある。

(1) 阮步兵嘯、聞<sub>レ</sub>数<sub>二</sub>百步<sub>一</sub>。蘇門山中、忽有<sub>二</sub>真人<sub>一</sub>、樵伐者咸共伝説。阮籍往觀、見<sub>レ</sub>其人擁<sub>レ</sub>膝巖側。籍登<sub>レ</sub>嶺就<sub>レ</sub>之、箕踞相對。籍商<sub>レ</sub>略終古<sub>一</sub>、上<sub>レ</sub>陳黃農玄寂之道<sub>一</sub>、下考<sub>二</sub>三代盛德之美<sub>一</sub>、以問<sub>レ</sub>之、屹然不<sub>レ</sub>応。復叙<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之教、棲神導氣之術<sub>一</sub>、以觀<sub>レ</sub>之、彼猶如<sub>レ</sub>前、凝矚不<sub>レ</sub>転。籍因對<sub>レ</sub>之長嘯、良久。乃笑曰、「可<sub>二</sub>更作<sub>二</sub>。籍復長嘯。意尽、退還半嶺許、聞<sub>二</sub>上嘯然有<sub>レ</sub>声<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>数部鼓吹<sub>一</sub>、林谷伝<sub>レ</sub>響。顧看<sub>レ</sub>、迺向<sub>レ</sub>人嘯也。

また、『晋書』卷四十九「列伝第十九・阮籍」に、次のような記事がある。

(2) 籍嘗於<sub>二</sub>蘇門山遇<sub>二</sub>孫登<sub>一</sub>、与<sub>レ</sub>商略終古及栖神導氣之術、登皆不<sub>レ</sub>応、籍因<sub>レ</sub>長嘯而退。至<sub>二</sub>半嶺<sub>一</sub>、聞<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>声若<sub>レ</sub>鸞鳳之音、響<sub>二</sub>乎<sub>レ</sub>巖谷<sub>一</sub>、乃<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>之嘯也。

どちらも阮籍が山に登り、孫登(楚門山の隱者)に会う逸話である。これについて、大上正美氏が重要な指摘をされている。<sup>(1)</sup>

巖側に姿を認めた楚門先生のところへ登っていった阮籍は、足を投げ出してリラックスして向き合うや、聞いてみたい胸の内を矢継ぎ早に質問するが、孫登はじつと阮籍をにらみ続けるばかりである。「因りて」(それで) 阮籍は孫登に対して長嘯する。それを聞いていた孫登は「乃ち」(なんと、はじめて)「もつとやれ」と言う。「長嘯」は魏晋の人たちがよくした呼吸法で、一種のストレス解消法であった。腹の底、喉の奥から息を長々

と吐き出す、そして心晴れ晴れとした開放感を全身体に味わう。つまり、阮籍は足を投げ出してリラックスして隠者の前に座って語りかけたが、相手は黙したままこちらをじつとにらみつけているばかりだった。しかしながら阮籍の心はゆったりと満たされており、この対面はかれにとつてのびのびとさせてくれる有り難い時間であった。前文からの意外な心の展開を示す「乃」の一字がこの間の心の動きをよく伝えている。普通なら居場所がない思いをさせられるほどの拒絶と受け取られるに違いない相手の応対であったが、しかし阮籍は前にいる孫登の存在感に打たれ、快い時間を持っていたのである。だからこそ「長嘯」した。するとそれを聞いた孫登が初めて笑って「もつとやれ」と、言葉を発した。「おまえ、分かるな」の笑いであり、返答だったのである。阮籍は再び長嘯し終わると、意を尽くしすっかり満足して、辞して山を下りて行く。中腹にさしかかったとき、山という山、谷という谷にオーケストラのような声音が響き渡る、振り返って仰ぎみると、阮籍に対する、孫登の「嘯」の応答であった。

大上氏の読みは首肯すべきで、「嘯」は阮籍と隠者孫登との間の通信手段であったと認めることができる。

日本の上代文献における「嘯」

『万葉集』2例

- (1) … 木の根取り 嘯鳴き登り 尾の上を 君に見すれば 男

神も 許したまひ 女神も ちはひたまひて …

(巻九、一七五三、高橋虫麻呂「検校使大伴卿の筑波山に登りし時の歌」)

(2) … 聞君嘯侶新流曲 禊飲催爵泛河清 (聞くならく君は侶に嘯き流曲を新たにし、禊飲に爵を催して河清に泛べつと。)

(巻一七、家持の池主宛書翰中の七言詩)

『日本書紀』2例

(3) 時に海神、鉤を彦火火出見尊に授け、因りて教へまつりて曰さく「…兄、海に入りて釣せむ時に、天孫海浜に在して、風招を作したまふべし。風招は即ち嘯なり。如此せば、吾、瀛風・辺風を起し、奔波を以ちて溺し悩さむ」とまをす。火折尊、帰来まして、具に神の教に遵ひたまふ。兄の釣する日に至及び、弟、浜に居しまして、嘯きたまふ。時に迅風忽ち起り、兄則ち溺れ苦しび、生くべきに由無し。

(巻二、神代下、第十段一書第四)

(4) 四年の春正月に、或いは阜嶺に、或いは河辺に、或いは宮寺の間に、遙に見ゆる物有りて、猿の吟に聴ゆ。或いは一十許、或いは二十許なり。就きて視れば、物便ちに見えずして、尚し嘯響聞え、其の身を獲観ること能はず。(日本に云はく、是の歳に、京を難波に移し、而して板蓋宮の墟と為らむ兆なりといふ。) 時の人の曰く、「此は是、伊勢大神の使なり」といふ。(巻二四、皇極)

『風土記』2例

(5) 風土記ヲ案スルニ、常陸国河内ノ郡浮嶋ノ村ニ鳥アリ。賀久賀鳥ト云フ。ソノ吟嘯ノ音声アイシツヘシ。大足日子天皇、此ノ村ノカリミヤニト、マリ玉フコト卅日、其ノ間、天皇此ノ鳥ノ声ヲキコシメシテ、伊賀理ノ命ヲツカハシテ網ヲハリテトラシメ玉フ。悦感シ玉テ、鳥取ト云フ姓ヲ給ハセケリ。其ノ子孫イマニ此ノ所ニスムト云ヘリ。

〔常陸国風土記〕信太郡逸文〔塵囊〕所引)

(6) 社郎と漁娘と、浜洲を逐ひて輻湊り、商豎と農夫と、舩に棹して往き来す。況むや、三夏の熱き朝、九陽の金なす夕、友を嘯ひ僕を率て、浜曲に並に坐て、海中を眺望かす。

〔常陸国風土記〕茨城郡)

『懷風藻』1例

(7) 五言 扈從吉野宮 一首 (作者紀男人)

五言 吉野宮に扈從す 一首

鳳蓋停南岳 鳳蓋十南岳に停まり

追尋智与仁 追尋す 智と仁とを

嘯谷将孫語 谷に嘯きて孫と語らひ

攀藤共許親 藤を攀ちて許と親しむ

峰巖夏景変 峰巖 夏景変はり

泉石秋光新 泉石 秋光新し

此地仙靈宅 此の地は仙靈の宅

何須姑射倫 何ぞ須あむ姑射の倫

上代日本に「嘯」の用例は少ない。『万葉集』に二例、『日本書紀』

に二例、「風土記」では『常陸国風土記』のみに二例、『懷風藻』には一例がある。(5)は鳥が鳴くさまであるが、(2)(6)は声を掛け、友を誘う意であつて、「嘯く」対象がいることを示している。『日本書紀』二例では神との交信の意味が認められる。(3)では天孫から海神への確かな通信手段であり、(4)では「伊勢大神」からの信号で、一説には遷都によつて板蓋宮が廢墟となる予兆であるという。(7)「紀男人扈從詩」の「嘯谷将孫語」の句はまさに前掲大上氏の解釈にあつた阮籍と孫登の交流を表現したものだと考えられる。「孫」はここに記述された「嘯く」を以つて阮籍の「嘯く」に応えた「孫登」のことだとすべきであろう。

虫麻呂歌における「嘯」も、虫麻呂から筑波の神への通信の試みではなかつたか。それに男神・女神がともに答えてくれたことによつて、虫麻呂が筑波の神との確かな関係性を実感したことを示しているのだろう。ということ、当該歌の流れを以下に示す。

大伴卿の案内者として筑波山に登る。

←

「嘯鳴き登り」||大伴卿に山頂をお見せするための神への通信の試み

←

「男神も許したまひ 女神もちはひたまひて…」||神への通信が成功

←

神との交信の成功を受けて、「紐の緒解きて 家のごと 解け

てそ遊ぶ」。常陸の地を「家」とする認識は、虫麻呂が筑波の神との関係を確信した結果である。「家」についての考察は今後の課題とする。

注

(1) 大上正美『嵇康の方法―文学としての論―』(研文出版、二〇二二年)

(2) 李満紅『懐風藻』における上官昭容詩の受容―紀男人「扈從吉野宮」を中心に―(早稲田大学古代研究会『古代研究』第五五号、二〇二二年二月)

【使用テキスト】(意によって改めた箇所がある。傍線・四角囲み等は発表者の手による)

・『万葉集』―新編日本古典文学全集『萬葉集』1〜4 小島憲之・木下正俊・東野治之校注訳

・『常陸国風土記』(逸文を含む)―新編日本古典文学全集『風土記』植垣節也校注訳

・『日本書紀』―新編日本古典文学全集『日本書紀』1・3 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注訳

・『懐風藻』―日本古典文学大系『懐風藻』文華秀麗集 本朝文粹 小島憲之校注

(り まんほん)